財団法人山武郡市文化財センター
発掘調査報告書第１１集

千葉県横芝町

木戸台大谷遺跡

（きどだいおおたに）

１９９２

株式会社　スガイ不動産
財団法人　山武郡市文化財センター

財団法人山武郡市文化財センター
発掘調査報告書第１１集

千葉県横芝町

木戸台大谷遺跡
（きどだいおおたに）

１９９２

株式会社　スガイ不動産
財団法人　山武郡市文化財センター

例　言

1．本書は千葉県横芝町木戸第字大谷1819-8他に所在する木戸台大谷遺跡（遺跡コード山文Y－3）の発掘調査報告書である。

2．調査は宅地造成に伴うもので、株式会社スガイ不動産の委託を受け、千葉県教育委員会および横芝町教育委員会の指導のもとに財団法人山武郡市文化財センターが実施した。

3．確認調査は平成3年2月21日～3月4日まで実施し、その成果をもとに本調査を平成3年4月16日～6月5日までおこなった。

4．発掘面積は610㎡である。

5．確認調査は調査研究員・吉田直哉が担当し、本調査および報告書作成は、調査研究員・稲見英輔が担当し調査課職員の協力をえた。

6．挿図の縮尺は各図に明記し、方位は真北とした。

7．出土遺物および測量原図、写真記録類は財団法人山武郡市文化財センターが収蔵保管している。

目　次

例　言

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境……1～2

Ⅲ　検出した遺構と遺物……3～13

参考・引用文献……14

挿図目次

第1図　周辺の遺跡と水系図……2

第2図　遺跡の推定範囲と調査区……3

第3図　全測図……4

第4図　遺構実測図 (1)……8

第5図　遺構実測図 (2)……9

第6図　遺構実測図 (3)……10

第7図　土器拓影図 (1)……12

第8図　土器拓影図 (2)……13

表　目　次

第１表　遺構観察表　(1)……5
第２表　遺構観察表　(2)……6
第３表　遺構観察表　(3)……7
第４表　縄文式土器等時期別数量比……11
第５表　礫の分類　……13

図版目次

図版１　調査区全景・ＦＰ－１・ＦＰ－３・ＦＰ－４・ＦＰ－５・ＦＰ－６・ＦＰ－７
ＦＰ－８
図版１　調査区全景・ＦＰ－２・ＦＰ－10・ＦＰ－11・ＦＰ－12・ＦＰ－14・Ｄ－３・Ｄ－４
Ｍ－１

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

今回の調査の発端は、株式会社スガイ不動産が当地木戸台字大谷1819-8、1820-5に宅地造成を計画したことによる。当遺跡一帯は町原古墳群として認識されていたが、過去に農協の建物建設に伴い山武考古学研究所により部分的に調査され、縄文時代早期の炉穴42基、同期の土坑７基、平安時代の土坑墓、７基、塚、埴輪片などが検出されている。今回の調査区は前回の調査区から北へ約70ｍの地点に位置する。平成２年度に当センターが調査の委託を受け平成３年２月21日～３月４日まで対象面積750㎡のうち10％の確認調査を実施し炉穴６基を検出した。その結果を受け、平成３年４月16日～６月５日まで対象面積610㎡の本調査を実施した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

本遺跡は、北総台地の南東端を樹枝状に開析して太平洋に流下する栗山川の支流高谷川の下流の西岸・標高36～40ｍの台地上に位置し水田面との比高差は23～29ｍを測る。本遺跡の周辺の台地や低地には様々な遺跡が数多く分布しており、特に木戸川と栗山川に画された台地上には濃密に分布している。ここでは上記の地域の縄文時代の遺跡に絞って紹介したい。

この地域における考古学研究の端緒は昭和20年～30年代に慶応大学考古学研究室によっておこなわれた九十九里浜沿岸地域の考古学的調査である。その成果は清水潤三氏の「千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（豫報）」に示されており、このエリアの貝塚研究の基礎資料となっている。以下同書の内容にそって述べたい。

牛熊貝塚は後期～晩期の地点貝塚で台地の北側斜面に貝類の散布が認められる。出土遺物は土器は加曽利Ｂ・安行Ⅰ、Ⅱ・姥山Ⅱ・千網式、土偶、磨製石斧、朱漆塗彩の骨製尖頭器など各種骨製品、貝の種類はハマグリが主体で鹹度が高い。

木戸台貝塚は中期～後期の地点貝層で谷奥の斜面に位置し、２地点からなる。主体となるのは中期で阿玉台・加曽利Ｅ式がほとんどである。この他打製石斧・磨製石斧がみられ、貝の種類はハマグリ・アサリがみられる。

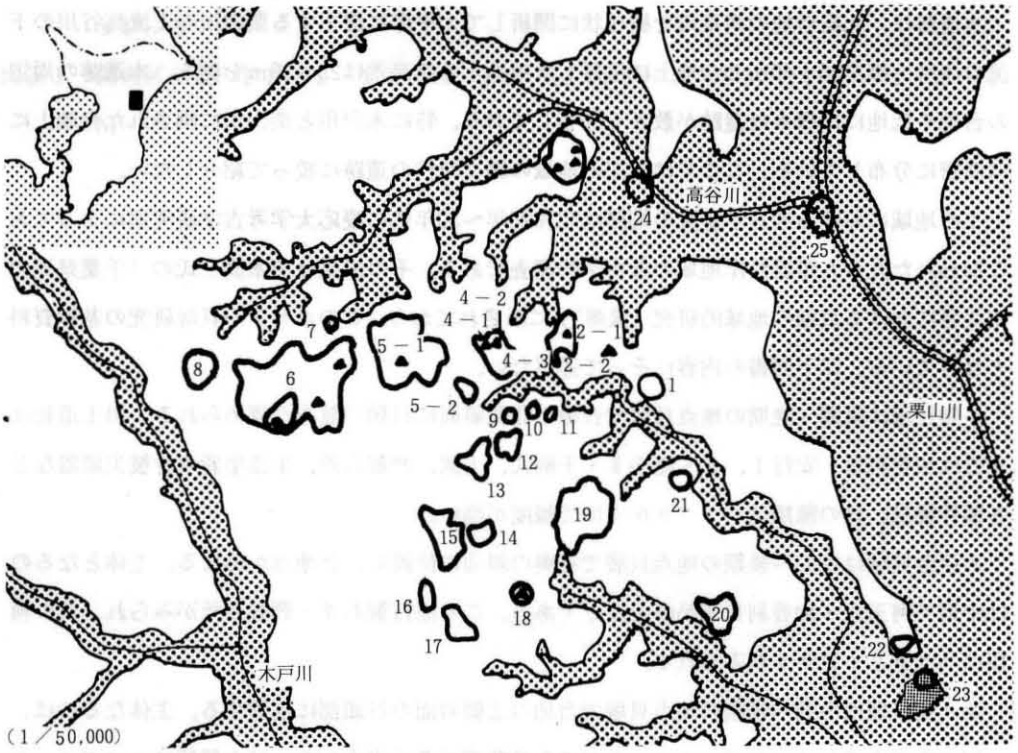
鴻ノ巣貝塚は中期～後期の地点貝塚で台地の北側斜面の谷頭部に位置する。主体なるのは、後期で称名寺式がほとんどである。このほか骨角器が多く出土した。貝の種類はハマグリ・シジミ・カキが多い。

姥山貝塚は現状で台地上に７個の地点貝塚が環状に分布する当地方で最大級の貝塚である。貝塚に囲まれた中央部分は、いわゆる「ダイダラ坊の足跡」と呼ばれる浅い凹地になっておりこれは下総台地に残された中・後期の大貝塚に通有に認められる特徴である。貝塚は主要なものがＡ・Ｂ・Ｃ・Ｚに分けられ、清水氏によってＡ・Ｃ・Ｚ地点が調査され、平成元年に県文

化財センターによりB・Z・地点貝塚の環の中央部がトレンチ調査された。その結果本貝塚は中期～後期～晩期にわたるもので、地点貝塚・遺物包含層・集落跡からなることが明らかとなった。出土遺物は土偶、鳥獣骨、鯨骨包丁、石斧、石鏃、石皿がみられる。貝の種類はハマグリ・ダンベイキサゴ・シジミが多い。

中台貝塚は九十九里地域で最も内陸部に位置する地点貝塚である。昭和54～55年に県文化財センターによって調査された。報文によると貝層は東西約250m、南北約170mの円弧状に不連続にならび環状貝塚の形態をとる大規模な集落の可能性がある。調査範囲は道路幅であるが地点貝塚の環の中央部から南方を貫き外縁部に及んでいる。時期は加曽利B式期が主体で、住居跡1軒、炉跡7基、埋甕炉跡7基、土坑109基が検出された。

東長山野遺跡は、昭和62～63年に日本考古学研究所により調査され、中期の阿玉台～加曽利E式期の集落であることが明らかとなった。遺構は住居跡44軒、土坑239基、柱穴群が検出された。



第1図　周辺の遺跡と水系図

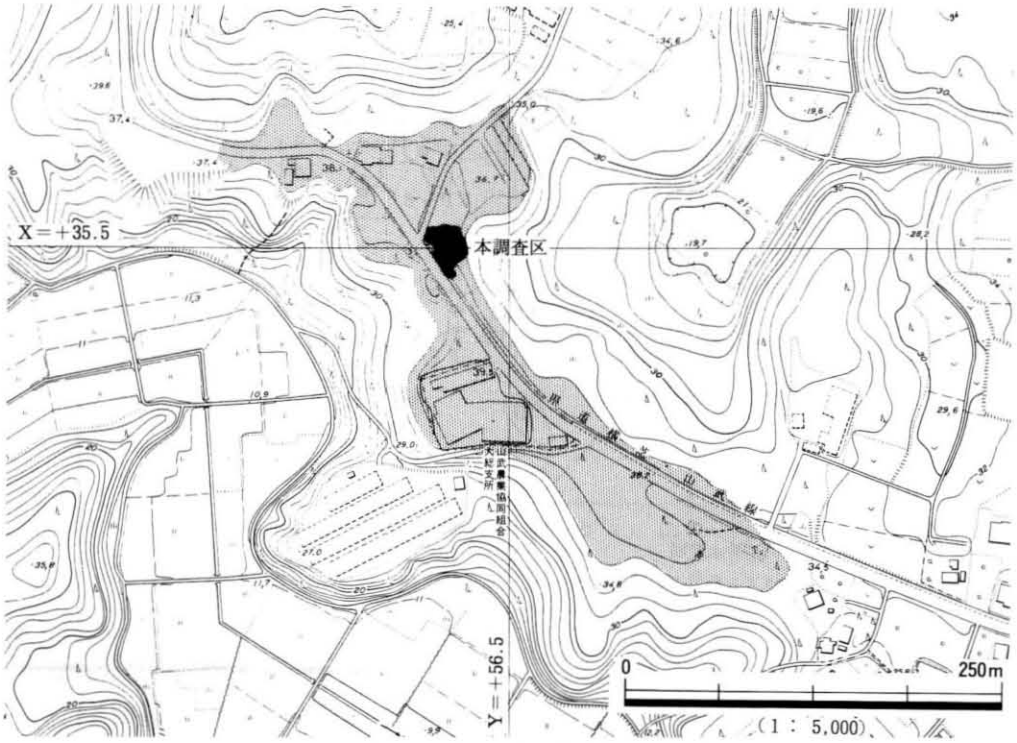
1．木戸台大谷遺跡2-1．木戸台第一貝塚2-2．木戸台第二貝塚3．牛熊貝塚4-1．鴻ノ巣貝塚4-2．角田貝塚（中・後期）4-3．角田遺跡（中・後期）5-1．中台A遺跡（貝塚・中・後期）5-2．中台B遺跡（中・後期）6．中台貝塚7．中台D遺跡（中・後期）8．鯉ケ窪遺跡（縄文式）9～13．東長山野Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡14．南長山野遺跡（縄文式）15上仁羅台遺跡（後・晩期）16．桜前遺跡（縄文式）17．天ノ作遺跡（後期）18．姥山貝塚19．大山遺跡（後・晩期）20．長倉遺跡（後期）21．中洞遺跡（早・前・中・後期）22．牙城遺跡（縄文式）23．坂田池遺跡（独木船）24．高谷山遺跡（独木船）25．於幾大縄場遺跡（独木船・縄文式）

Ⅲ　検出した遺構と遺物

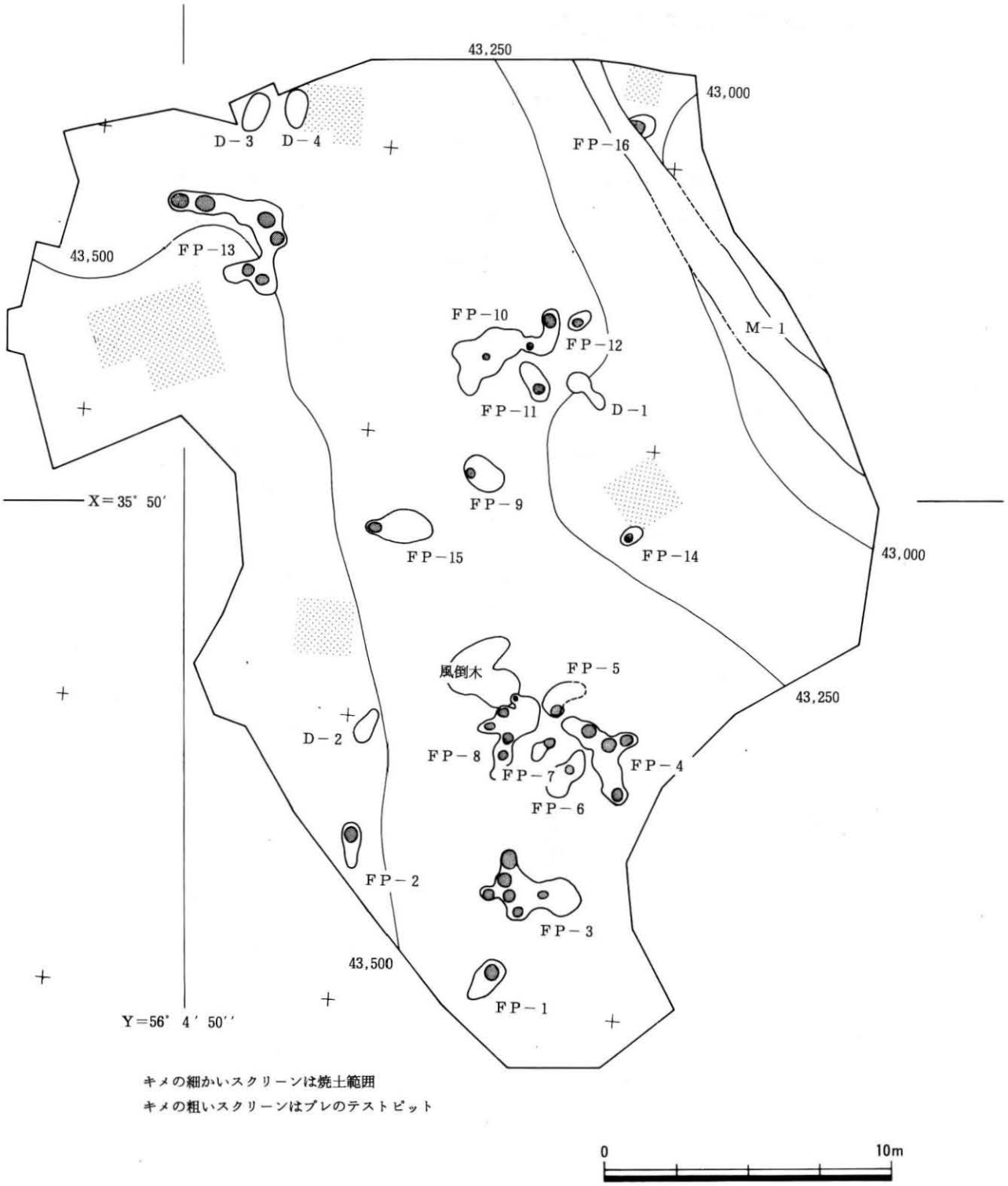
A　遺構について

今回の調査では、炉穴16基・土坑４基・溝１条を検出した。溝以外は各遺構とも古墳造営時に削平され遺存状況はあまり良いとは言えない。構築年代については出土遺物から、炉穴と土坑は縄文時代早期末葉の条痕文系・子母口式～野島式期でとりわけ子母口式期が中心を占めている。このことは、ほとんど野島式期のみの前回の調査結果と照らして、本台地上を地点を変えながら居住域としていたと考えられる。各遺構の分布状況は、炉穴を中心にほぼ３～９基で一群をなしており、そのようなブロックが３群みられる。各ブロックについてみてみると、第１ブロック（ＦＰ－13・Ｄ－3､4）第２ブロック（ＦＰ－9､10､11､12､14､15・Ｄ－１）第３ブロック（ＦＰ－1､2､3､4､5､6､7､8､・Ｄ－１）に分けられる。

溝については、調査区の範囲外にも延びており全体を把握していないが、台地の肩部に沿って平坦面と斜面を画するように構築されており、覆土中より古墳時代の遺物（土師器・須恵器）が出土がみられる点、後の時代の遺物がみられない点、覆土の色調・混入物などから古墳造営時における関連施設とも考えられる。

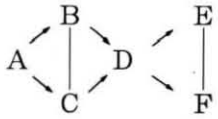


第２図　遺跡の推定範囲と調査区


43,250
43,000
D－3
D－4
FP－16
43,500
FP－13
FP－10
FP－12
M－1
FP－11
D－1
FP－9
X＝35° 50′
FP－15
FP－14
43,000
風倒木
FP－5
43,250
D－2
FP－8
FP－7
FP－4
FP－6
FP－2
FP－3
43,500
FP－1
Y＝56° 4′ 50″
キメの細かいスクリーンは焼土範囲
キメの粗いスクリーンはプレのテストピット
0
10m

第3図　全測図

第1表　遺構観察図（1）

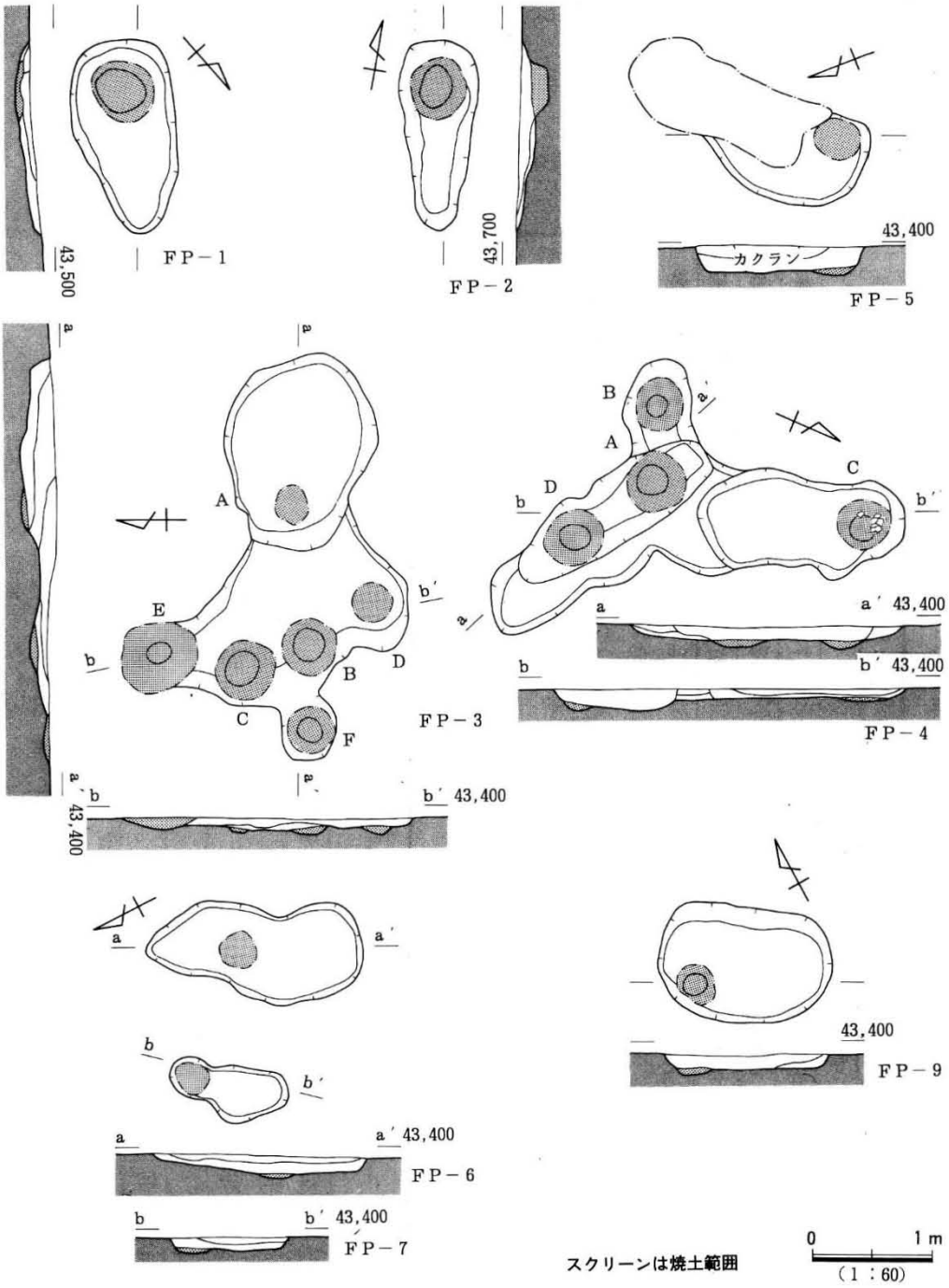
種　類	No.	規　　模　　(cm) 長　軸・短　軸　(同坑底)	焼　土　(cm) 長・短・厚	土層と出土遺物	備　　考
炉	1	165・87（155・75）	57・50・7	5分層黒褐色土主体	
	2	163・67（133・47）	52・47・15	3分層黒褐色土主体	
	3　A	重複関係が著しいため 測定不可	34・30・3,4	9分層黒褐色土主体 土器1点・条痕文系 （子母口式）	
	3　B		49・47・4,4		
	3　C		53・50・3,3		
	3　D		45・44・7		
	3　E		66・56・9		
	3　F		41・41・5		
穴	4　A	測定不可	54・50・10	9分層黒褐色土主体 土器8点・条痕文系 （子母口・野島式）	A→B→C→D
	4　B	測定不可	48・43・7,2		
	4　C	176・83（155・68）	47・43・4		
	4　D	190・58（154・24）	53・47・7		
	5	大きく攪乱され不明	40・34・3,6	3分層黒褐色土主体	
	6	102・48　(92・48)	30・25・4	3分層黒褐色土主体	
	7	185・82　(74・72)	34・32・4,7	3分層暗褐色土主体 土器2点・条痕文系 （子母口式）	
	8　A	測定不可	39・29・3,5	6分層暗褐色土主体	
	8　B	153・測定不可	35・32・6,9		
	8　C	213・測定不可	37・30・4,7		

第2表　遺構観察表（2）

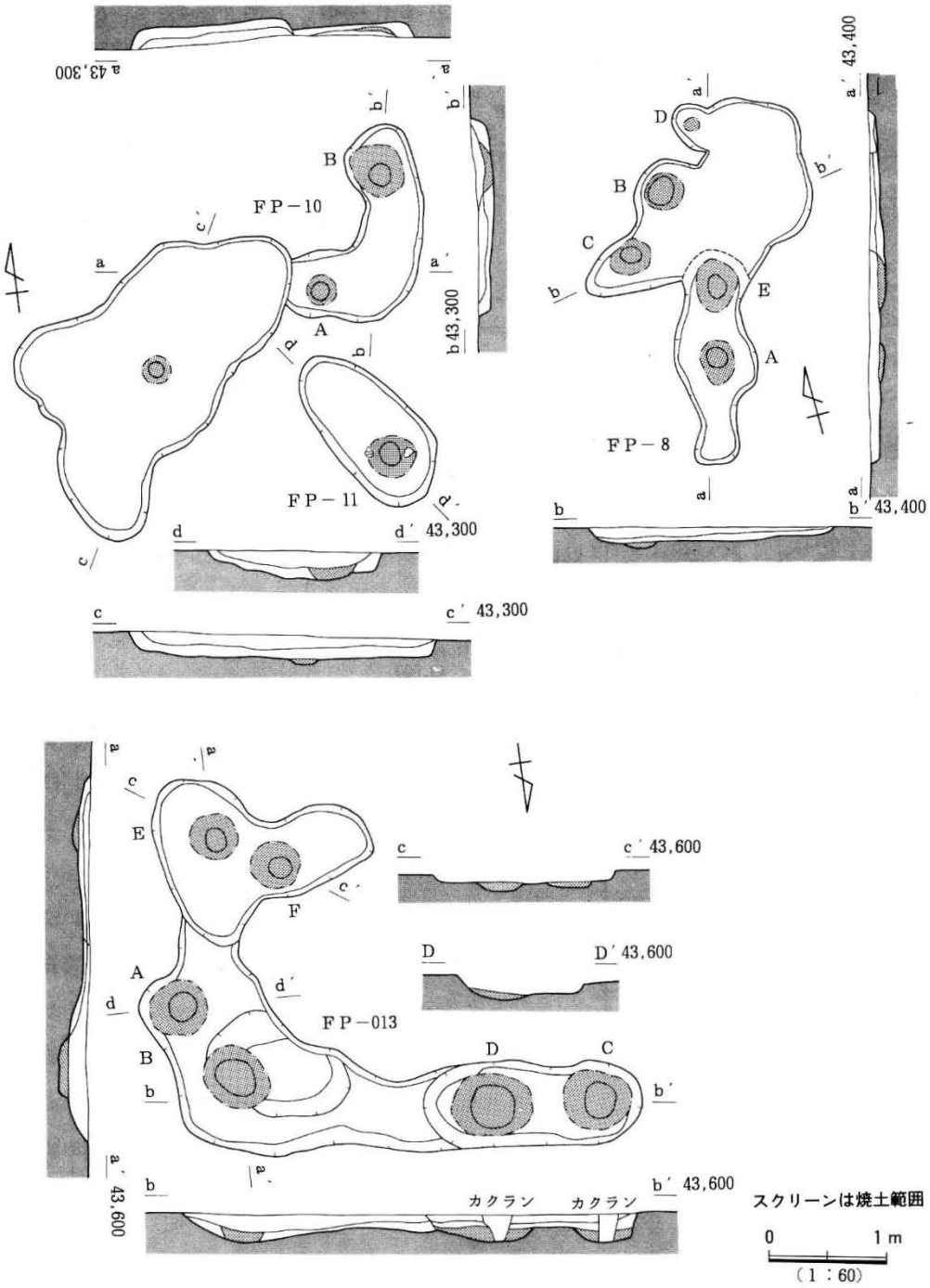
	8　D 8　E	112・測定不可 185・71（174・65）	19・11・0,1 46・38・7,4	6分層暗褐色土主体 黒曜石製チップ1点	
	9	150・98（136・75）	37・31・4,5	3分層黒褐色土主体	
炉	10　A 10　B 10　C	測定不可 170・70（162・50） 292・167（289・154）	26・26・0,2 52・43・9 24,5・24・1,7	7分層茶褐色土主体 土器9点・条痕文系 （子母口式）	A　→B　→C
	11	154・75（137・64）	42・37・10	3分層黒褐色土主体 土器2点・条痕文系	
	12	82・53（78・42）	37・29・3,4	3分層茶褐色土主体	
	13　A 13　B 13　C 13　D 13　E 13　F	重複関係が著しいため 測定不可	49・48・5,4 60・49・9 58・52・11 70・54・12 43・39・4,9 43・42・6,5	7分層黒褐色土主体 土器2点・条痕文系 （子母口式）	E　A ｜　←｜　→C　→D F　B
穴	14	88・52　（77・41）	29・27・3	3分層黒褐色土主体	
	15	230・117（207・91）	45・35・4	3分層暗褐色土主体 土器4点・条痕文系 （子母口・野島式）	
	16	測定不可	測定不可	2分層茶褐色土主体	M－1が切る

第3表　遺構観察表（3）

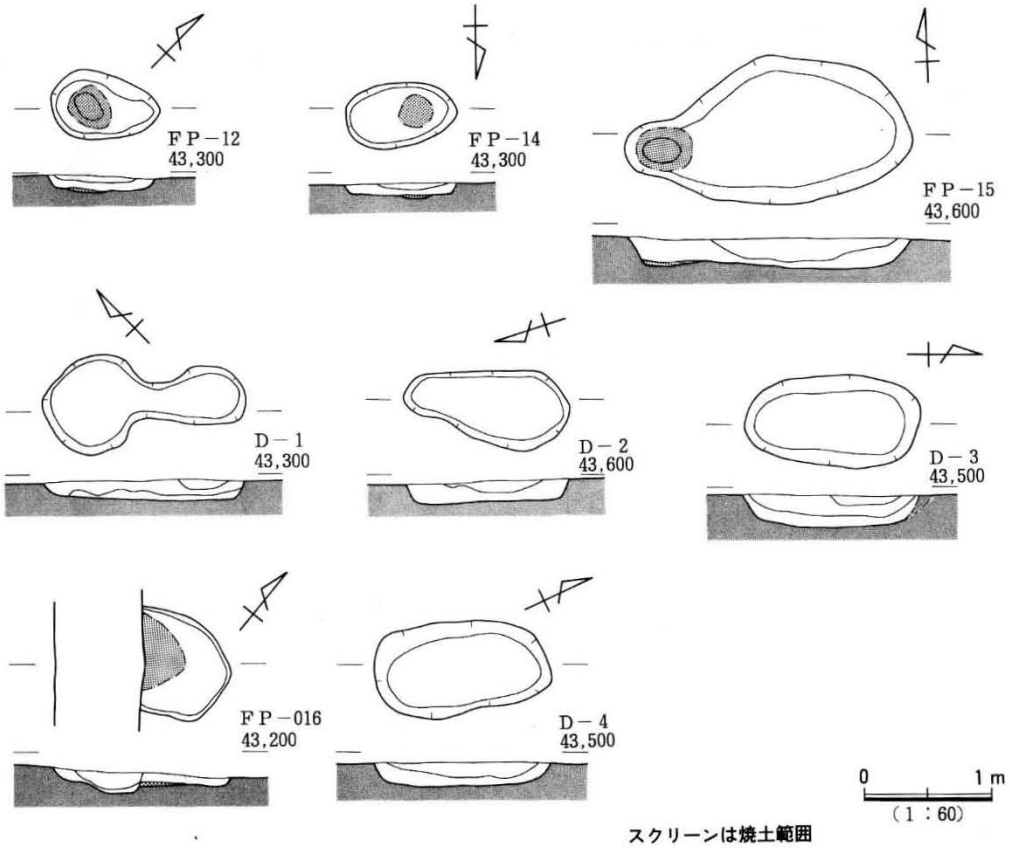
種　類	No.	規　　模　（cm） 長　軸・短　軸　（同坑底）	深　さ　（cm）	土層と出土遺物	備　　考
土坑	1	161・80（149・69）	17	3分層暗褐色土主体	
	2	134・65（122・50）	17,5	2分層暗褐色土主体	
	3	141・74（120・51）	27	3分層黒褐色土主体	
	4	142・78（122・54）	18	2分層黒褐色土主体 珪質頁岩のチップ2点　（旧石器時代的）	
溝	1	1800・61 （調査範囲内）	20	2分層暗茶褐色土主体　土器4点（条痕文系3点・土師器1）	FP－16を切る


FP－1
43,500
FP－2
43,700
FP－5
43,400
カクラン
FP－3
FP－4
a′ 43,400
b′ 43,400
43,400
FP－6
FP－7
FP－9
スクリーンは焼土範囲
0
1 m
(1：60)

第4図　遺構実測図（1）


FP－10
FP－11
FP－8
FP－013
a 43,300
b 43,300
a′ 43,400
b′ 43,400
d′ 43,300
c′ 43,300
c′ 43,600
D′ 43,600
b′ 43,600
a′ 43,600
カクラン
カクラン
スクリーンは焼土範囲
0
1 m
（1：60）

第５図　遺構定測図（２）


FP－12
43,300
FP－14
43,300
FP－15
43,600
D－1
43,300
D－2
43,600
D－3
43,500
FP－016
43,200
D－4
43,500
0
1 m
（1：60）
スクリーンは焼土範囲

第6図　遺構実測図（3）

B　出土遺物について

今回の調査では遺構内出土のものを含め、土器159点、礫17点、チップ４点の総点数180点が出土した。調査期間の制約などにより出土地点の詳細な記録は取れなかったものの、特に集中的な分布状況はみられなかった。このことは、炉穴や土坑に伴う遺物包含層などの生活痕跡が、調査区に近接する方墳（町原４号墳）の造営時にローム漸移層まで削平され消失されたことが大きく関わっていると考えられる。

ア　土器について

今回の調査では、遺構内33点、遺構外126点の土器が出土した。遺構外出土の個体でも、多くは遺構の近くで出土し遺構との関連性が窺われるが、町原４号墳造営時の削土で、本来的な位置を失っている可能性がある。

次に出土土器の時期別・割合は右表に示すが、縄文時代早期の条痕文系が圧倒的に多く、今回検出された炉穴群とともに該期においては、居住空間として使用されたことがわかる。

第４表　縄文式土器等時期別数量比

時　　期	点数	%
早期条痕文系	137	86,2
子母口式 野島式	83 4	(52,2) (2,5)
微細破片	50	(31,5)
時期不明細片	8	5
後期～晩期	8	5
土師・須恵器	6	3,8
合　　計	159	100,0

土器の分類

１群土器　縄文時代早期末葉の条痕文系土器を一括した

A類（１～29）

子母口式を本類とした。施文要素・せいけい技法により細分した。

１種（１～７）

表裏に条痕文を施文するもの。拓影ではわかりづらいが３は土器の表面の上端に鼠の食痕がみられる。

２種（９～22）

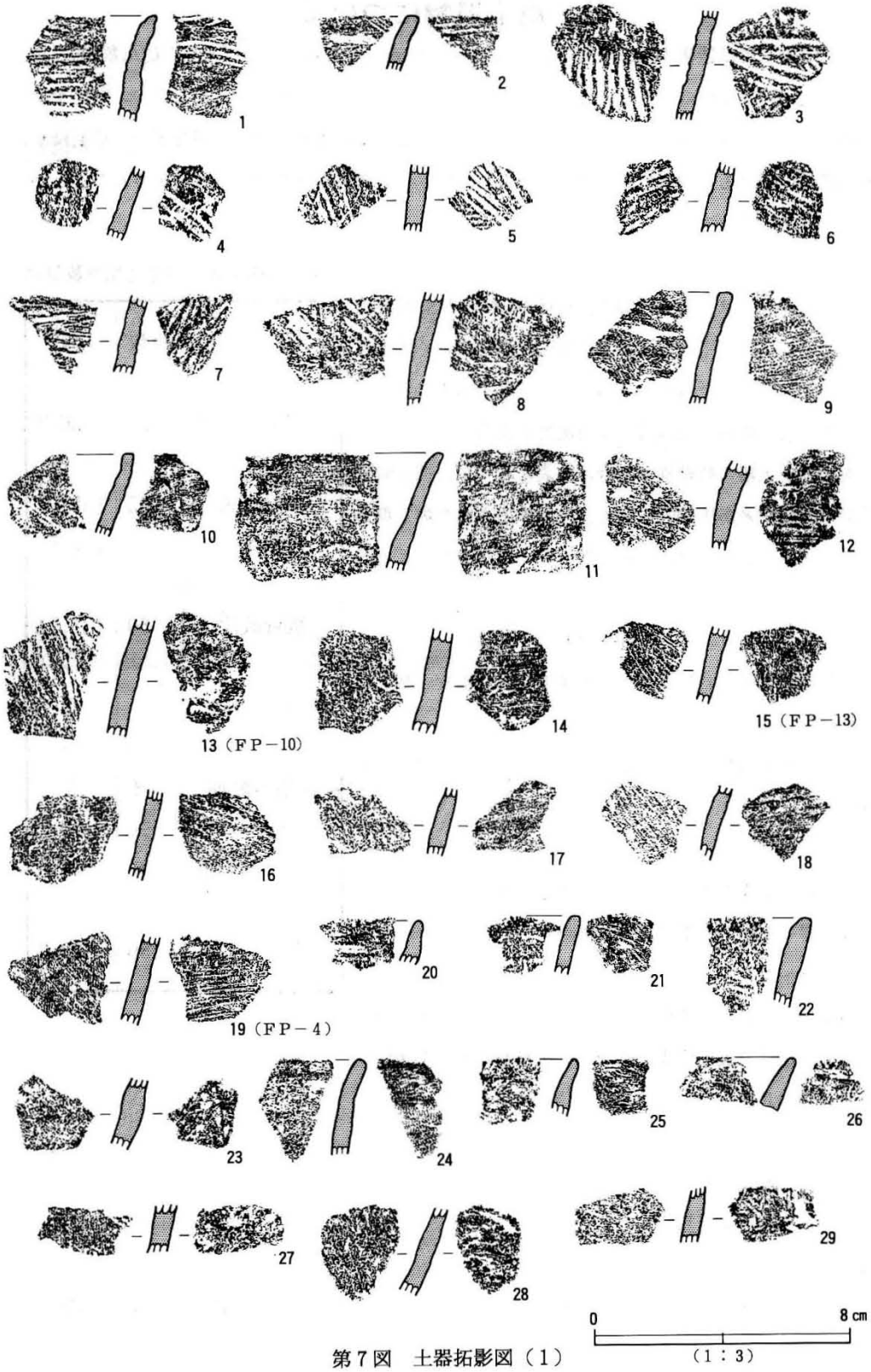
繊維状の工具（広葉樹による）でナデツケされるもの。表面は斜位に、裏面は横位にナデツケられるものが多い。なお、13はＦＰ－10、15はＦＰ－13、19はＦＰ－４からの出土。

３種（20～20）

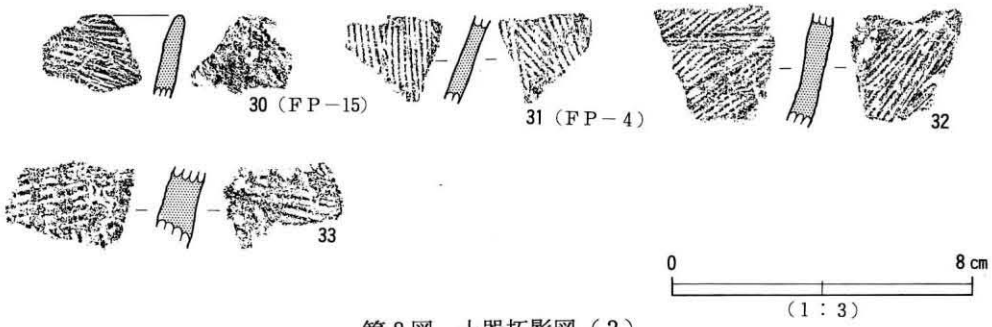
無文及び擦痕文を施すもの

B類（30～33）

野島式を本類とした。なお33は他と比べ厚手で、条痕が太くシャープさに欠ける点などから時期的に降る可能性がある。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13（FP－10）
14
15（FP－13）
16
17
18
19（FP－4）
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
8 cm
（1：3）

第7図　土器拓影図（1）



第8図　土器拓影図（2）

2群土器　縄文時代後期～晩期の土器を一括した。細片が多く形式名がわかる個体は少ないが、加曽利B式～晩期安行式が多いようである。このなかで、姥山Ⅲ式の深鉢の口縁部片があったが、紙数の都合で今回は掲載しなかった。

3群土器　古墳時代の土師器と須恵器である。いずれも細片のため形式名までわからない。出土地点が町原4号墳造営時の関連施設と思われるM－1の覆土や、調査区の壁面の下位からなので町原4号墳を造営した頃のものかもしれない。なお図は掲載しなかった。

イ　礫・チップについて

調査区から礫が17点出土しているがいずれも散在しており、集中する傾向はみられない。礫はみな被熱していない。

次にチップについては、旧石器時代的なものも出土しており、遺構内出土のものを除き、出た地点を囲むようにテストピットを設定したが、新たな発見はなかった。

チップの総数は4点で、黒曜石製1点、珪質頁岩製3点で、このうち黒曜石製のものはFP－8から、珪質頁岩製の1点はD－4からの出土である。

第5表　礫の分類

種　別	点数	重量（g）
破砕礫	9	482,3
完形礫	8	693,4
合　計	17	1175,7

参考・引用文献

1958　清水潤三　「千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（豫報）」『史学』27-4
慶應義塾大学

1976　今井恵昭・加藤修　「第Ⅲ章縄文時代の遺構と遺物Ａ．炉穴」『田中谷戸』
町田市田中谷戸遺跡調査会

1977　湖口淳一　「Ⅴマウンド下の遺構と遺物⑵縄文時代」『木戸台遺跡』
横芝町教育委員会・横芝町木戸台遺跡調査団

1984　安孫子昭二　「Ⅲ縄文時代の遺構と遺物⑵炉穴・焼土」『小山田遺跡群Ⅳ』
小山田遺跡調査会

1985　千葉県教育委員会　『千葉県埋蔵文化財分布地図⑵－千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区－』

1985　横山　仁　「第二章中台貝塚・第三節遺構・遺物・１遺構とその出土遺物」
小宮　孟　「第二章・第三節・５自然遺物」
『主要地方道成田松尾線Ⅴ』　千葉県文化財センター

1989　平岡和夫　『千葉県九十九里地域の古墳研究』

1991　蔀　淳一　『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』千葉県文化財センター
酒巻忠史　『富津市内遺跡発掘調査報告書－富士見台遺跡』　富津市教育委員会

図版１

調査区全景（南東から）

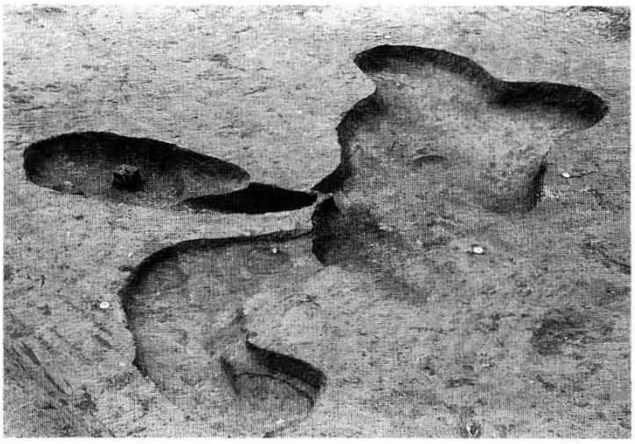
ＦＰ－１（南から）

ＦＰ－４（南から）

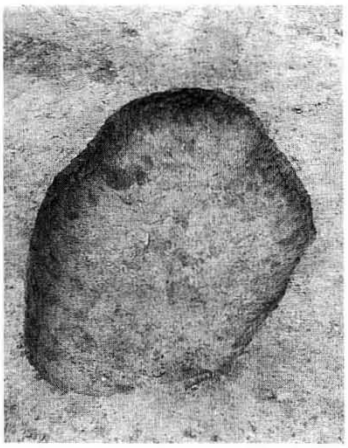
ＦＰ－３（南東から）

ＦＰ－５　ＦＰ－４
ＦＰ－８　ＦＰ－７　ＦＰ－６（南西から）

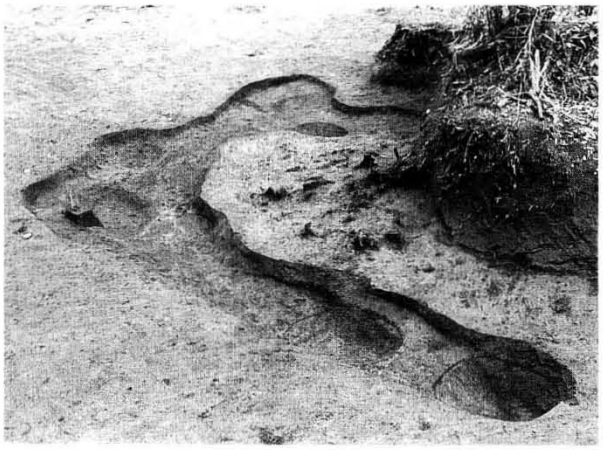
ＦＰ－２（南西より）



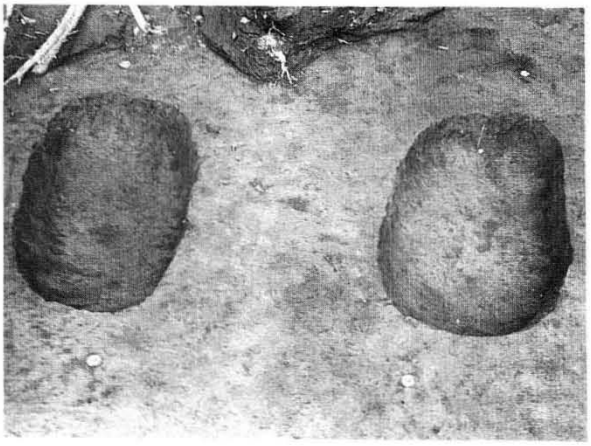
ＦＰ－10　ＦＰ－11（北東より）



ＦＰ－14（東より）

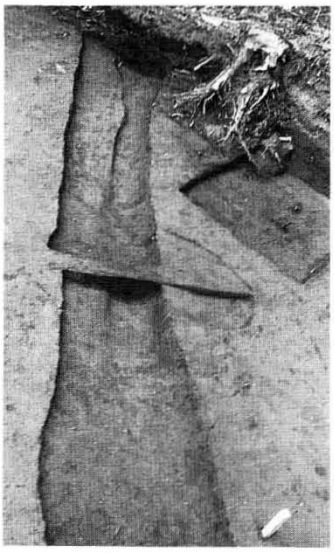


ＦＰ－12（北西より）



Ｄ－３　（南より）　Ｄ－４

Ｍ－１
（南より）



千葉県横芝町

木戸台大谷遺跡

平成4年3月30日発行

編　集　財団法人山武郡市文化財センター
発　行　大網白里町金谷郷1356-2
　　株式会社スガイ不動産

印　刷　株式会社　弘報社印刷

　　千葉市緑区古市場474-268